

仕事と育児の両立は可能になったのか？ ーデータから見る両立の難しさー

文学研究科 人間行動学専攻社会学専修 博士後期課程3年 上野志保
キーワード：母親の就業キャリア、系列分析、ワーク・ファミリー・コンフリクト

1. 目的

1992年、育児休業等に関する法律が施行され、第1子出産後も就業継続する女性は年々増加している(図1)。しかし、「仕事と育児の両立は可能になった」といえるのだろうか。本報告の目的は、ライフコースやワーク・ファミリー・コンフリクトの観点から、仕事と育児の両立に関する課題の所在を明らかにすることである。

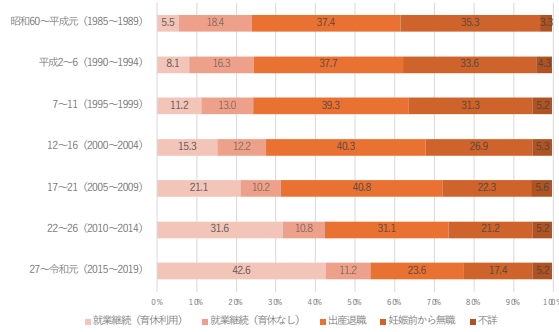


図1 子どもの出生年別第1子出産前後の妻の就業経歴参照) 『男女共同参画白書 令和5年版』

2. 先行研究

- 仕事と育児の両立支援は多くの国で取り組まれているが、母親が仕事を辞めたり、働き方を調整したりせざるをえない状況は無くならない (Parasuraman and Greenhouse 1997; 西村 2009; 額賀・藤田 2022)
- 先進諸国のような、高学歴女性の方がより就業継続する傾向は見られない (中井 2009)
- 子どもが未就学であることは、ワーク・ファミリー・コンフリクトを高める要因 (Byron 2005; 西村 2006; 山口 2010)

3. 母親の就業キャリアの実態

データ: 「2015年社会階層と社会移動全国調査(SSM調査)」
方法: 系列分析(アンドリュー・アボットが生物学の手法を社会学に応用)
分析対象: 第1子妊娠時から子どもが10歳になるまでの職歴データがある女性

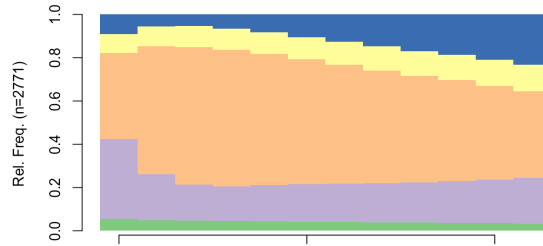


図2 妊娠以降の職業キャリア (横軸: 子どもの年齢-1~10歳)

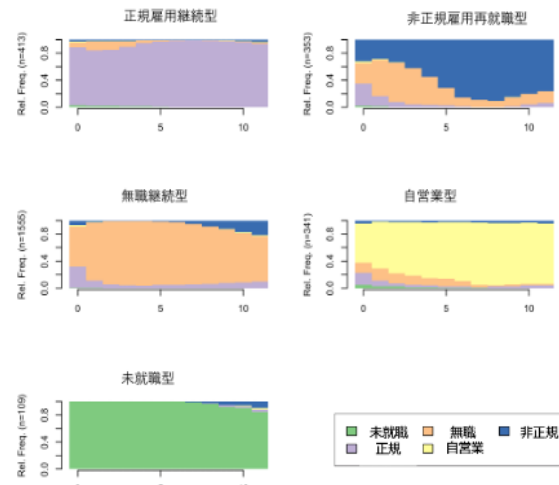


図3 最適マッチング法による類型構築

表1 各類型とコーホートの関係

	正規雇用継続型	非正規雇用再就職型	無職継続型	自営業型	未就職型	合計
1935-1954	183 (13.09)	111 (7.94)	767 (54.86)	244 (17.45)	93 (6.65)	1398
1955-1974	194 (16.88)	180 (15.67)	681 (59.27)	84 (7.31)	10 (0.87)	1149
1975-1994	36 (16.07)	62 (27.68)	107 (47.77)	13 (5.80)	6 (2.68)	224
合計	413 (14.90)	353 (12.74)	1555 (56.12)	341 (12.31)	109 (3.93)	2771

4. ワーク・ファミリー・コンフリクトと子どもの年齢

- ストレスを生じさせる背景となる社会構造をストレス・アプローチの観点から分析する。
- 使用データ: 「全国家族調査パネルスタディ (NFRJ-08Panel)」

ワーク・ファミリー・コンフリクトとは「役割間葛藤の一形態で、仕事と家庭の各領域からの役割要請が、いくつかの点でお互いに両立し難いこと」(Greenhouse and Beutell 1985: 77)。

分析対象項目

- 「時間に関する葛藤 (time-based)」
「仕事が原因で家族と一緒に過ごす時間が十分とれない(WIF_time1)」
「家においても仕事のことが気になってしかたがないことがある (WIF_time2)」
「家族のあれやこれやで思うように仕事に時間を配分できない (FIW_time1)」
- 「ストレス面での葛藤 (strain-based)」
「家事や育児で疲れてしまい、仕事をやろうという気持ちになれない (FIW_strain)」

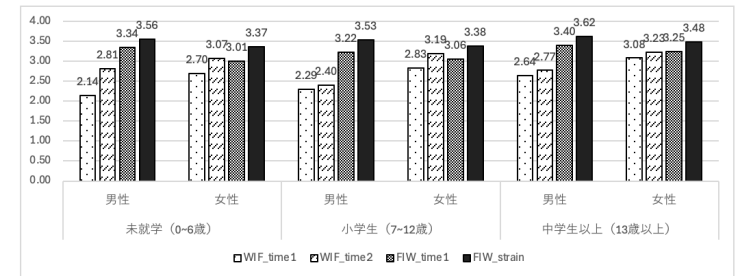


図4 末子年齢×性別×ワーク・ファミリー・コンフリクトの平均

5. 結論と今後の課題

- 第1子出産後も長期的に就業継続する割合は、若いコーホートでもあまり増加していない。
- WIF_time1の平均は、男女ともに末子就学以降に増加が見られ、仕事と育児の両立に困難があることがわかった。
- 仕事と育児の両立が可能な環境や条件は、かなり限定的であることが推察される。
- 今後、関連する説明変数を加え多変量解析を行い、現代社会における仕事と育児の両立について詳細に分析する予定である。